



海洋ごみ調査マニュアル

Ver. 1.0

目次

1. 背景と目的	3
2. 調査の準備	4
2-1. 実施場所の選定	4
2-2. 回収ごみの種類の決定	4
2-3. 実施許可及び連携体制	5
2-4. 道具の準備	5
2-5. 作業リスクアセスメントの実施	5
2-6. 告知	6
3. ごみ回収と記録手法	7
3-1. 参加者への回収方法の説明	7
3-2. 記録するデータ	8
3-3. 回収ごみの重量測定	8
3-4. 回収ごみの写真撮影	9
3-5. 海洋ごみ MAP アプリへの写真反映	10
3-6. 集合写真の撮影	10
4. データ整理及び考察	11
4-1. データ整理の目的	11
4-2. Excel シートへの記録及びグラフの作成	11
4-3. 回収ごみの写真の整理と保存	12
4-4. データシートの保管(原紙の管理)	12
4-5. 考察	13
4-6. データ整理に必要な物品	13
5. 回収ごみの処理と再資源化	14
5-1. 回収ごみの保管と廃棄	14
5-2. 回収ごみの再資源化	14
5-3. パートナー探し	14
5-4. 洗浄	15
5-5. 乾燥	15
5-6. 分別作業	15
5-7. 裁断・破碎作業	15
5-8. 梱包・送付	15
5-9. 必要な物品	15

1. 背景と目的

NPO 法人クリーンオーシャンアンサンブルでは、海上および河川における小型回収装置を用いた回収困難な海洋ごみの回収と、分別回収型ビーチクリーンによる漂着ごみの陸上回収を組み合わせ、包括的なごみ回収・調査活動に取り組んでいる。特に、低コストかつ環境負荷の少ない装置を用いた海洋ごみの自動回収と、素材を意識した分別活動による再資源化の促進は、地域との協働を通じた持続可能な社会の構築に資する重要な手段となっている。

本マニュアルでは、これらの活動のうち、分別回収型ビーチクリーンに焦点を当てる。本手法では、回収したごみを素材別に分類・計量し、その結果を定量的データとして記録・可視化することで、発生傾向の把握や発生源の推定、研究や政策提言への応用が可能となる(図 1)。また、プラスチックや金属などの素材を選別することで、再資源化可能なごみの量を最大化し、単なる清掃活動にとどまらない資源循環型の環境対策として機能する。

私たちは、「海洋ごみゼロ」の達成に向けて、限られた人員・時間・資源の中でも、回収量と再資源化量の双方を最大化することを重要な目標として掲げている。そのためには、科学的根拠に基づいた分別・計量・記録手法の確立と、それを市民参加型で運用可能な形に整えることが求められる。このように、科学的手法と地域実践を融合させた分別型ビーチクリーンは、市民参加型科学(Citizen Science)の一例としても注目される。本マニュアルは、科学性と社会性の双方に立脚し、調査の信頼性と社会的効果の両立を可能にする実践的な手順書として位置づけられるものである。



回収する

Collection

- ✓ 生態系の保護
- ✓ 景観の向上
- ✓ 参加者の意識向上



分別する

Sorting

- ✓ 再資源化効率の向上
- ✓ 環境負荷の軽減
- ✓ 持続可能な循環型社会の促進



計量する

Weighing

- ✓ 活動成果の可視化
- ✓ データによる改善・効率化

図 1. 分別回収型ビーチクリーン.

2. 調査の準備

2-1. 実施場所の選定

調査対象となる海岸は目的に応じて決定するが、継続的な調査活動の実施の観点から以下の条件を満たす場所が好ましい。

- ・ ごみの漂着が見込まれる地点(湾内、河口周辺など)
- ・ 安全に立ち入れる地形(斜面・転落の危険がない)
- ・ 地元自治体や管理団体との連携が可能である場所

事前に、過去の清掃実績、潮汐表及び天候等の確認をすることで、より安定した環境での調査が期待できる。

2-2. 回収ごみの種類の決定

調査の目的に応じて、回収するごみの種類を予め決めておく。なお、本マニュアルでは調査及び再資源化を高効率に実施するために以下の 10 種類の分類とした(図 2)。厳密な素材の判断には機器分析が必要となるが、現場での判断は困難であるため簡易判断基準を併記した。

- ① 発泡スチロール 判断基準: 目視、触感(空気を多く含有しているため軽くて脆い)
- ② ビン、ガラス類 シーグラス含む。判断基準: 目視、触感(プラスチックよりも重く、硬い)
- ③ 缶 判断基準: 目視
- ④ ペットボトル(PET) 判断基準: 目視
- ⑤ 鉄、鉛 判断基準: 目視
- ⑥ 硬質プラ(PP) ペットボトルキャップ含む。判断基準: 目視、触感(硬く、手で簡単に変形しない)
- ⑦ 軟質プラ(PE) 判断基準: 目視、触感(柔らかく、手で簡単に曲がる)
- ⑧ ボール 判断基準: 目視
- ⑨ 釣り具 判断基準: 目視
- ⑩ その他(燃えるごみ) 混合物または汚れや損傷の激しい素材 判断基準: ①～⑨の素材として再資源化不可



図 2. ごみの種類.

2-3.実施許可及び連携体制

- ・ 土地の管理者(自治体や漁協など)から実施許可を取得する。
- ・ 参加者の安全管理を徹底する(危険なごみやエリアの注意喚起、緊急時体制の整備など)。
- ・ 主催側の役割分担を明確にする。

例:ビーチクリーンチーム(参加者への分別回収の説明、参加者と一緒にごみの回収など)、調査チーム(回収ごみの記録、重量測定など)、広報チーム(調査の様子の写真撮影など)。

2-4.道具の準備

以下の道具を事前に準備する。

- ・ ごみ袋(内容物の視認性向上の観点で無色透明の袋推奨)
- ・ 回収用のバッグ(ごみ袋を装着し回収をサポートするツール)
- ・ 回収道具(トング)
- ・ 保護手袋(ゴム手袋または軍手)
- ・ 吊りばかり
- ・ データシート
- ・ バインダー(データシートの固定に使用)
- ・ 筆記用具
- ・ 撮影機器(スマートフォンまたはデジタルカメラ)
- ・ 車または軽トラック(道具及びごみ運搬用)
- ・ 説明用のポスター
- ・ 会場への案内板
- ・ 回収ごみを再資源化したサンプル

2-5.作業リスクアセスメントの実施

海洋ごみ回収活動は、自然環境下での作業となるため、参加者の安全確保を第一に考慮する必要がある。本活動において想定される主なリスクは、物理的、気象的、生物学的及び衛生的リスクに分類される。

(1) 物理的リスク

回収対象となるごみには、ガラス片や金属片など鋭利な物が含まれることがあり、手や足の負傷を招くおそれがある。また、波打ち際や岩場など不安定な地形では、転倒や滑落の危険性がある。これらに対しては、手袋とトングの着用を徹底させ、作業範囲を安全な区域に限定するなどの対策を講じる。また、ごみの搬出や運搬時には重量物の持ち上げによる腰痛や転倒のリスクもあるため、適切な重量制限を設け、複数人での運搬を推奨するとともに、台車などの補助器具を活用することが望ましい。

(2) 気象的リスク

特に高温時には熱中症、強風時には飛来物による事故、雷雨時には落雷のリスクがある。活動

前に気象情報を確認し、基準に基づいて中止を判断すること、また帽子や水分の携帯を参加者に促すことが重要である。

(3) 生物学的リスク

クラゲやハチとの接触、あるいは野生動物との不意の遭遇が挙げられる。危険生物の出没が予想される区域では注意喚起を行い、応急処置用品を携行するなどの備えが求められる。

(4) 衛生的リスク

注射器、排泄物、油分などの汚染物が含まれる可能性がある。これらは原則として回収対象から除外し、参加者が直接触れないよう指導を徹底する。

以上のリスクに対する評価と対策をあらかじめ整理・共有し、活動開始前に参加者へ周知することで、安全かつ円滑な海洋ごみ回収活動の実施が可能となる。

2-6. 告知

SNS やホームページ上で開催日時、集合場所、実施場所、持ち物及び注意点を周知する。実施時期が月次で固定されていると参加者の予定を調整しやすく、継続的な活動が期待できる(例：毎月第3土曜日の10:00～)。

3. ごみ回収と記録手法

3-1. 参加者への回収方法の説明

活動開始前に、参加者へ以下の要点を簡潔に説明する。

(1) 活動概要と目的

本活動は、漂着ごみを素材別に分別・計量し、データとして記録することで、発生傾向の把握や再資源化の促進を目的とする。これは「海洋ごみゼロ」と循環型社会の実現に向けた、市民参加型科学(Citizen Science)の一環である。

(2) スケジュールの共有

当日の流れ(オリエンテーション → 回収 → 計量・記録 → まとめ・集合写真撮影)を説明し、所要時間も案内する。所要時間はそれぞれ、オリエンテーション:5 分間、回収:30 分間、計量・記録:20 分間、まとめ・集合写真撮影:5 分間、合計約 1 時間である。

(3) 分別回収の方法の説明

参加者は道具を受け取った後、あらかじめ①～⑩の 10 種類のごみ分類のうち一つを選択する。選択した分類に該当するごみのみを回収し、それ以外のごみは拾わない(図 3)。例えば、A さんが④「ペットボトル」を選んだ場合、回収するのはペットボトルのみであり、①～③および⑤～⑩のごみは収集対象外となる。

ただし、他の分類のごみを拾ってしまった場合は、その分類を担当している別の参加者に渡し、該当のごみ袋に入れてもらうようにする。例えば、A さんが①「発泡スチロール」を拾った場合、それは自身の袋には入れず、①を担当している B さんの袋に入れる。

この方式により、ごみの混在を防ぎ、分類の精度とデータの信頼性を確保できる。この方法により 30 分間回収を行う。

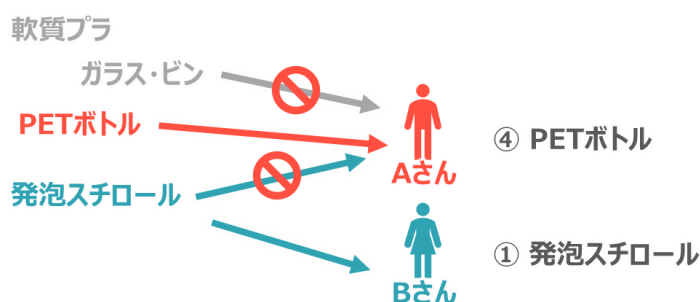


図 3. 分別回収型ビーチクリーンの方法.

(4) 回収不可なごみの説明

安全かつ適切な活動のため、以下のごみは原則として回収対象外とする。

・ 回収困難なごみ

以下のものは、回収困難または回収しても処分が困難であるため回収しない。

流木、産業廃棄物(漁網、ブイなど)、重量物、袋に収まらないごみ全般

・ 回収が危険なごみ

人体や衛生上の危険を伴う以下のごみは回収しない。

注射器、医療廃棄物、排泄物や汚泥、動物の死骸、化学薬品、油類、発火性のあるもの

3-2. 記録するデータ

分別回収型ビーチクリーンにおける成果を定量的に把握し、結果のまとめや考察、再資源化や提言等に活用するため、以下の情報を記録する。

(1) 基本情報

- ・ 実施日時
- ・ 実施場所(海岸名・地点)
- ・ 活動時間(ごみ拾いに要した実働時間)
- ・ 参加人数(延べ人数)

(2) 回収ごみのデータ

- ・ 分類別ごみ重量(kg)
各重量を小数点第 2 位まで記録する。
例:発泡スチロール:2.10 kg、ペットボトル:4.35 kg など
- ・ 分類別ごみ袋数(袋)
例:ペットボトル:3 袋、硬質プラ(PP):4 袋 など
- ・ 分類別ごみの外観
スマートフォン等でごみの外観を袋毎に撮影する。
- ・ 全体のごみ袋数(袋)
全分類を合計した総袋数。
- ・ 総回収重量(kg)
全分類を合計した総重量

これらのデータは、現場では印刷したデータシートをバインダーに固定したものまたは実験ノートに貼り付けたものに記録する。

3-3. 回収ごみの重量測定

分別回収したごみは、袋ごとに重量を測定する。吊りばかりを使用し、分類別(①～⑩)の各袋について 1 袋ずつ順に計測を行う。計測前に「Tare」ボタンを押し、はかりが 0 kg であることを確認したうえで袋を吊る。測定中は風や手の揺れにより表示が不安定になる場合があるが、数値が安定したタイミングで小数点第 2 位までの重量を読み取り、データシートに記録する。なお、海岸は風が強いことが多いため、データシートはマグネット付きのバインダーで固定すると好ましい。これにより、記録の正確性と効率を確保できる。

表 1. 記録用のデータシート.

No.	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩		
ごみ分類	発泡スチロール	ビン、ガラス類	缶	ペットボトル	鉄・鉛	硬質プラ (PP)	軟質プラ (PE)	ボール	釣り具	その他 (燃えるごみ)		
備考		シーグラス含む				PETボトルキャップ含む						
アップサイクル	×	○	○	×	○	○	×	×	○	×		
Entry	袋数 [袋]	重量 [kg]	袋数 [袋]	重量 [kg]	袋数 [袋]	重量 [kg]	袋数 [袋]	重量 [kg]	袋数 [袋]	重量 [kg]	袋数 [袋]	重量 [kg]
1												
2												
3												
4												
5												
6												
7												
8												
9												
10												
11												
12												
13												
14												
15												
16												
17												
18												
19												
20												
合計	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
袋合計	0	袋										
重量合計	0.0	kg										

3-4. 回収ごみの写真撮影

写真撮影には、カメラ付きスマートフォンまたはデジタルカメラを使用する。写真は後の解析や報告資料に活用されるため、以下の点に留意して撮影を行うこと。

- ・ ごみの全体像と吊りばかりを含む写真(全景、図 4a) 及び、はかりの表示を拡大した写真(重量表示、図 4b)の 2 枚を撮影する。
- ・ ごみに影がかからないよう注意し、明るく均一な光環境を確保する(図 4c)。
- ・ 背景に他のごみや人物が映り込まないように配慮し、記録写真としての明確性とプライバシーの保護を両立させる。
- ・ 可能であれば、白い布や白板を背景に設置し、ごみの輪郭や素材が明瞭に写るようにする。

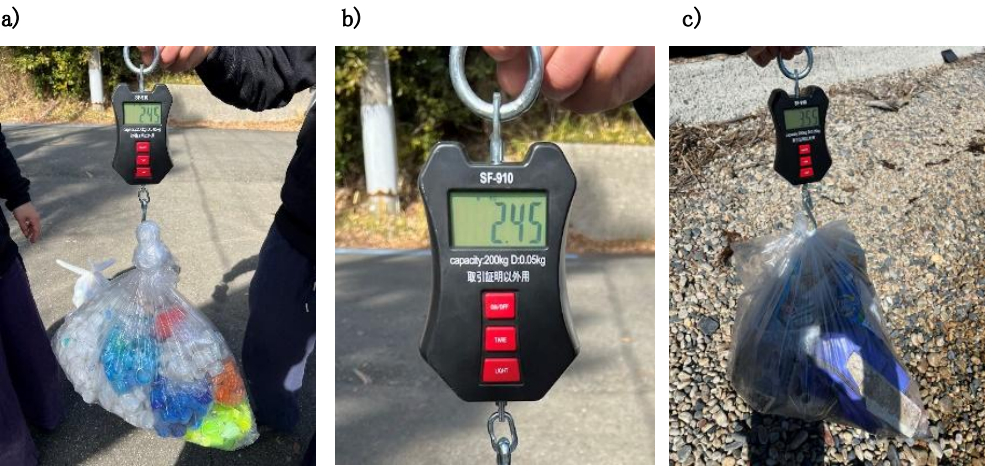


図 4. 回収ごみの写真撮影. a) ごみの全体像と吊りばかりを含む写真. b) はかりの表示を拡大した写真. c) ごみに影がかからないよう注意.

3-5. 海洋ごみ MAP アプリへの写真反映

クリーンオーシャンアンサンブルが提供する「海洋ごみ MAP アプリ」は、海洋ごみの回収活動を可視化し、データとして蓄積・共有するためのツールである(図 5)。本アプリにより、回収したごみの写真や位置情報、回収時間などを簡単に記録・アップロードできる。以下に詳細な手順を示す。

(1) アプリのダウンロードとインストール

iOS ユーザーは App Store から、Android ユーザーは Google Play から「Clean Ocean Ensemble」アプリをダウンロードする。

(2) 写真撮影

アプリを起動し、回収したごみの全体像と吊りばかりが一緒に写った写真(全景)を撮影する。撮影時には、影がごみにかからないよう注意し、明るく均一な光環境で撮影し、ごみの輪郭や素材が明瞭に映るようにする。また、背景に他のごみや人物が映り込まないように注意し、記録写真としての明確性とプライバシー保護を確保する。

(3) データの入力とアップロード

撮影後、回収ごみの撮影日時及び緯度経度が反映されていることを確認したのちに、ごみのカテゴリー「海辺」を選択し、アップロードを行う。

3-6. 集合写真の撮影

分別回収型ビーチクリーンの実施記録として、集合写真を撮影する。写真には、実施場所、参加者、回収したごみ全体が収まるように構図を調整すること。

集合写真の撮影は、回収ごみの数量イメージの可視化、回収ごみの数量イメージの可視化、参加人数の記録及び活動の広報・報告資料としての活用の観点で重要である。なお、撮影時は、プライバシーへの配慮(顔が写ること、広報用への活用等の同意確認)を行い、必要に応じて集合位置や撮影角度を調整する。



図 5. 海洋ごみ MAP アプリ.



図 6. 集合写真.

4. データ整理及び考察

4-1. データ整理の目的

分別回収型ビーチクリーンで得られたデータは、整理、保存及び可視化を通して、研究や報告資料としての活用価値を高めることができる。本セクションでは、データシート(Excel)への記録、グラフ生成、ごみの写真の管理及び生データの保管までの流れを示す。

4-2. Excel シートへの記録及びグラフの作成

目的に応じて Excel で表を作成し、ごみの種類、重量及び袋数を記入する。本マニュアルにおいては、既に作成済の Excel ファイルを用いて説明する。

- (1) Excel ファイル【海洋ごみ調査マニュアル】を開き、「ごみデータシート(データ整理用)」のタブを選択する。
- (2) 分類番号(①～⑩)ごとに、袋数と重量(kg)を数値で入力する(表 2)。
- (3) 入力が完了すると、「まとめ表」タブに各分類の合計値が自動的に反映される(表 3)。
- (4) 同時に、「グラフ」タブにも以下のグラフが生成される
 - ・ 重量の棒グラフ(分別ごとの重量)
 - ・ 重量率の円グラフ(再資源化の区分表示)

色の意味は、資源にならないその他(燃えるごみ):赤色、再資源化可能なごみ:緑色。これにより、活動全体の傾向や再資源化比率が視覚的に把握可能となる。

表 2. データシートへの各数値の入力.

No.	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩		
ごみ分類	発泡スチロール	ビン、ガラス類	缶	ペットボトル	鉄・鉛	硬質プラ（PP）	軟質プラ（PE）	ボール	釣り具	その他（燃えるごみ）		
備考	シーグラス含む					PETボトルキャップ含む						
アップサイクル	×	○	○	×	○	○	×	×	○	×		
Entry	袋数 [袋]	重量 [kg]	袋数 [袋]	重量 [kg]	袋数 [袋]	重量 [kg]	袋数 [袋]	重量 [kg]	袋数 [袋]	重量 [kg]	袋数 [袋]	重量 [kg]
	1	0.50	1	1.2	1	1.1	1	1.50	1	4.15	1	2.15
	2	0.40			1	0.45			1	2.55	1	3.15
	3	0.20							1	1.55	1	2.05
	4											
	5											
	6											
	7											
	8											
	9											
	10											
	11											
	12											
	13											
	14											
	15											
	16											
	17											
	18											
	19											
20												
合計	3	1.10	1	1.20	1	1.10	2	1.95	0	0.00	3	8.25
袋合計	15	袋										
重量合計	27.35	kg										

表 3. まとめ表.

ごみ				目標：重量 500 kg/年		アップサイクル			調査	
No.	分類	素材	化学組成	重量 [kg]	重量分率 [wt%]	可否	重量 [kg]	アップサイクル率 [wt%]	未分類量 [kg]	未分類率 [wt%]
1	発泡スチロール	プラスチック	ポリスチレン (PS)	1.10	4.02	×	0	0	-	-
2	ビン、ガラス類	ガラス	ケイ酸ナトリウム (SiO ₂ ・Na ₂ O)	1.20	4.39	○	1.20	4.39	-	-
3	缶	金属	スチール缶：鉄 (Fe)、 アル缶：アルミニウム (Al) 合金	1.10	4.02	○	1.10	4.02	-	-
4	ペットボトル	プラスチック	ポリエチレンテレフタレート (PET)	1.95	7.1	×	0	0	-	-
5	鉄・鉛	プラスチック	ポリプロピレン (PP)	0.00	0	○	0	0	-	-
6	硬質プラ (PP)	プラスチック	ポリプロピレン (PP)	8.25	30.2	○	8.25	30.2	-	-
7	軟質プラ (PE)	プラスチック	ポリエチレン (PE)	7.35	26.87	×	0	0	-	-
8	ボール	プラスチック	天然ゴム (NR)、 スチレン・ブタジエンゴム (SBR)	0.00	0.00	×	0	0	-	-
9	釣り具	プラスチック	-	0.00	0.0	○	0	0	-	-
10	その他 (燃えるごみ)	混合物	-	6.40	23.4	×	0	0	6.40	23.4
Total				27.4	100		10.6	38.6	6.4	23.4

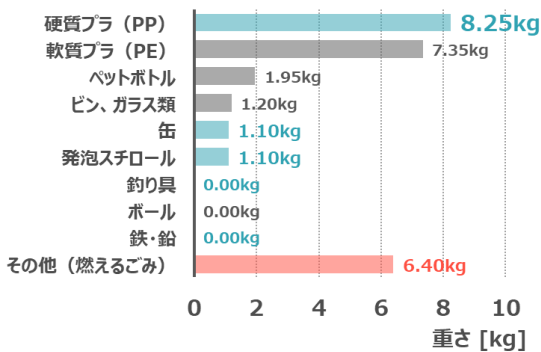


図 7. 重量の棒グラフ(分別ごとの重量).

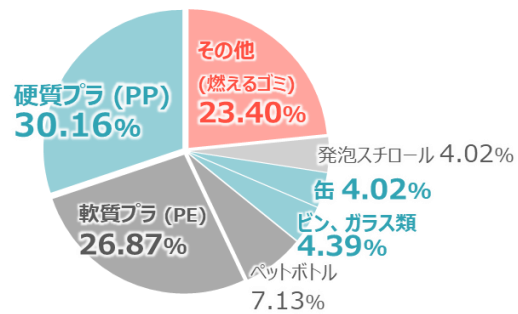


図 8. 重量分率の円グラフ(再資源化の区分表示).

4-3. 回収ごみの写真の整理と保存

撮影した回収ごみの写真は、データの共有と保存性の観点から、Google フォトまたは Google ドライブなどのクラウドストレージサービスに保存することが望ましい。Google フォトは視覚的な一覧性に優れており、Google ドライブはファイル名の編集や分類管理がしやすいという利点がある。保存時のファイル名は任意であるが、後から写真とデータを照合しやすくするために、以下の形式による命名が推奨される。

分別番号 + 種類 _ 重量(例:④ペットボトル_1.35kg)

このように整理することで、分類ごとの確認が容易となり、誤認や記録ミスの防止にもつながる。

4-4. データシートの保管(原紙の管理)

グラフや集計表など加工されたデータは見やすく有用であるが、元となる手書きのデータシート(生データ)も信頼性の根拠として極めて重要である。理作業終了後は、紙のデータシートを紛失

しないよう、実験ノートに糊で貼り付けて保存することが望ましい。生データの保管は、データの再確認・検証・外部報告時のエビデンスとしても機能する。

4-5. 考察

分別回収型ビーチクリーンにより得られたデータは、単なる清掃活動の成果にとどまらず、海洋ごみの発生源特定、再資源化の可能性評価及び地域特性の理解など多角的に分析・考察することが重要である。以下に、考察の一例を示す。

(1) ごみの構成比と発生源の推定

分類別の重量比を分析することで、海洋ごみの主な発生源を推定できる。例えば、ペットボトルや食品包装材(軟質プラ(PE))などの生活系プラスチックが多く回収された場合、陸域からの流出が主因と考えられる。実際、神奈川県調査では、回収された海洋ごみのうち 95%が陸域起源であることが明らかになっている。

(2) 再資源化可能な素材の割合と課題

回収されたごみの中で、再資源化可能な素材(例:硬質プラ(PP)、ガラス・びん類など)の割合を評価することで、再資源化の可能性と課題を明確化できる。例えば、硬質プラの色分けや裁断作業など、再資源化に向けた前処理の必要性が浮き彫りになる。

(3) 地域特性とごみの分布傾向

回収地点ごとのごみの種類や量を比較することで、地域特性や季節変動の影響を分析できる。例えば、特定の海岸で漁具や発泡スチロールが多く回収された場合、近隣の漁業活動や海流の影響が考えられる。

(4) 参加者人数と回収効率の関係

回収量を参加人数及び実施時間で除した回収効率(kg/人・h)を分析することで、活動の効率性や効果を評価できる。これにより、より高効率な海洋ごみ回収を実現するための活動計画や人員配置に役立てることができる。

(5) 政策提言への活用

整理・分析されたデータは、地域の海洋ごみ対策や再資源化促進の政策提言に活用できる。例えば、特定のごみが多く回収された場合、そのごみの発生抑制策(例:リデュース・リユースの推進、製品設計の見直し)を提案する根拠となる。

4-6. データ整理に必要な物品

- ・ データシート
- ・ PC
- ・ ネット環境
- ・ 表計算ソフト(例:Excel)
- ・ 実験ノート
- ・ のり、はさみ

5. 回収ごみの処理と再資源化

5-1. 回収ごみの保管と廃棄

分別・計量が終わったごみは、分類別に袋を閉じる。再資源化可能または将来的に再資源化を予定している素材は一時保管場所へ集約する(本マニュアルでは、②ビン・ガラス類、③缶、④ペットボトル、⑤鉄・鉛、⑥硬質プラ(PP)、⑧ボール及び⑨釣り具が対象)。保管場所は、直射日光を避け、風雨に晒されることのない場所、例えば倉庫が望ましい。また、作業性の観点から車両搬出が可能な地面の平らな場所が付近にあることが好ましい。再資源化を予定していない素材については、地元の自治体や管理団体の指定した廃棄場所に運搬し、廃棄する。その際、地域のごみ回収ルールや収集施設の分類基準に則って処理する必要がある。

5-2. 回収ごみの再資源化

回収ごみのうち、再資源化可能または将来的に再資源化を予定している素材は前処理を行った後に再資源化を行う(図 9)。本マニュアルでは、②ビン・ガラス類、③缶、④ペットボトル、⑤鉄・鉛、⑥硬質プラ(PP)、⑧ボール及び⑨釣り具が対象である。ただし、汚染及び破損が著しい場合は再資源化困難である。具体的な線引きは、再資源化先との協議が必要である。以下に具体的な再資源化の工程を示す。



図 9. 再資源化の素材と得られるもの

5-3. パートナー探し

アップサイクルを担う企業や団体(例:再生材メーカー、アーティスト、研究機関など)を事前に調査及び連絡を行い、受入条件を確認する。ごみの種類、量及び前処理の有無に応じて対応可否が異なるため、事前調整が必要である。

5-4. 洗浄

異物、塩分及び泥などの汚れを除去するために水洗を行う。洗浄作業は衛生的リスクの観点から、ゴム手袋を着用して実施する。油分や頑固な付着物がある場合は、適宜洗剤を使用する。

5-5. 乾燥

洗浄後の素材は、日陰または通気性の良い場所で十分に乾燥させる。水分が残った状態では物性の低下や臭気発生の可能性があり、再資源化に支障をきたす場合があるので注意する。

5-6. 分別作業

再資源化先の条件に従い、素材別や色別の分別(例:硬質プラスチックの色分けなど)を行う。誤混入を防ぐため、識別が難しい素材は無理に混ぜず、除外する判断も重要である。

5-7. 裁断・破碎作業

素材の加工性を高めるために、ハサミ、カッターまたはミルサーなどを用いて小さく裁断・破碎する。作業中は刃物使用による指先の切創リスクがあるため、注意深く実施し、場合によっては軍手または耐切創手袋を着用する。

5-8. 梱包・送付

分別・処理後の素材の重量を測定し、記録する。素材別に袋詰めまたは箱詰めし、パートナーの指定に沿って送付する。

5-9. 必要な物品

- ・ 洗浄槽 衣装ケースやたらいでも代用可能
- ・ ゴム手袋 洗浄時の保護具
- ・ 軍手または耐切創手袋 裁断・破碎時の保護具
- ・ 裁断道具 ハサミ、カッター、小型破碎器(ミルサーなど)
- ・ 分別容器 色分け・素材分けのための箱、袋など
- ・ 乾燥スペース 通気性のある日陰(ネットまたは棚も有効)